

令和 5 年 6 月 30 日現在

機関番号：33804

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K02082

研究課題名(和文) 実践共同体における社会福祉実践の継承過程の構造 - 中動態における事象に着目して -

研究課題名(英文) Structure of Succession Process of Social Work Practice in a Community of Practice: Focusing on Phenomena in Middle Voice

研究代表者

福田 俊子 (Fukuda, Toshiko)

聖隷クリストファー大学・社会福祉学部・教授

研究者番号：20257059

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、ソーシャルワーカー(以下、ワーカー)の自己生成プロセスを支える「実践共同体(以下、共同体)」の構造を明らかにすることを目的とし、15年以上の臨床経験を有するワーカーを対象にインタビュー調査を実施した。その結果、研修体制などの整備により、共同体は減っている、共同体はワーカーが所属する法人内外で生成され、法人内では、明確なテーマをもつ集団ともたない集団に大別される、複数の強共同体に通底しているのは、「人間理解に基づいた人間尊重」という価値である、メンバー同士の「緩やかなつながり」を内包する共同体には、新たな社会福祉実践を生成する高い可能性を有していることなどが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

少子高齢社会が急激に進むわが国においては、すべての人が世代や背景を問わずに安心して暮らし続けられるよう、複雑化する支援ニーズに対応できる地域づくりと、その役割を担うソーシャルワーカー(以下、ワーカー)の育成が急務の課題となっている。本研究は、この課題解決に対し貢献するとともに、普段あまり意識しない相互のつながりを実践共同体という概念を用い可視化されたことで、自らの実践を省察することもできるであろう。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was clarifying the structure of the "community of practice" that supports the self-development process of social workers. An interview survey was conducted with incumbent workers with clinical experience of about 10 to 50 years. As a result, (1) the formation of practice communities has decreased due to the development of training systems, (2) practice communities are formed inside and outside the corporation to which workers belong, and communities within corporations are groups with clear goals and clear themes. (3) the value of "respect for human beings based on understanding of human beings" is the underlying value of multiple communities of practice within the corporation, and (4) it has become clear that practice communities that do not have a clear theme that includes "loose connections" have a high potential for generating new social welfare practices.

研究分野：社会福祉

キーワード：ソーシャルワーカー 中動態 実践共同体

1. 研究開始当初の背景

1987年における社会福祉士及び介護福祉士法の成立をもって、ソーシャルワーカー（以下、ワーカー）は、専門職として社会的に承認されることになったが、近年、その専門性に関して疑問が呈され、2007年には社会福祉士、2010年に精神保健福祉士の養成カリキュラムが改正された。その後2015年9月に示された「新たな時代に対応した福祉の提供ビジョン」で、少子高齢社会が急激に進むわが国においては、すべての人が世代や背景を問わず、安心して暮らし続けられるまちづくり（全世代・全対象型地域包括支援）をする方向性が打ち出されことにより、ワーカーにはさらなる「実践力」の強化が求められることとなった。

こうした動きと連動するように、横山（2008）らによってワーカーの成長や自己生成過程に関する研究が積極的に取り組まれるようになった。本研究の研究者（2011、2017）は、ワーカーの自己生成を「実践能力」や「援助観」といった側面から予め捉えることはせず、自己生成に影響を与える臨床体験の構造自体を明らかにすることを目的とした調査を実施した結果、以下の知見を得ることができた。

ワーカーの自己生成プロセスにおける「節目」となる臨床体験は、自己に不足しているものの自覚を促す「不在の感覚」が変容の契機となり、事象に「巻き込まれる」「問われる - 応答する」「教わる」という円環構造を有する「巻き込まれ続けている」という中動態で生起することが明らかとなった。例えば、一人前になる以前に経験した「失敗」の意味を棚上げし、問い続けること、すなわちその体験に「巻き込まれ続けている」ことが、ワーカーとしてのゆるがない自らの実践の基軸を生成する。そして、この生成プロセスを支えている装置の一つが、J. Lave and W. Wenger (1991=1994) によって規定された「実践共同体」であることも明らかになった。

しかしながら、「あるテーマにかんする関心や問題、熱意などを共有し、その分野の知識や技能を、持続的な相互交流を通じて深めていく人々」の非公式な集団であるとされている実践共同体が、「状況に巻き込まれ続ける」ワーカーをいかにして支えているのか、その構造自体を明らかにすることはできていない。これを明らかにすることができれば、ワーカーの育成について、何らかの指針を得ることができると捉え、本研究に取り組むこととした。

2. 研究の目的

本研究では、特定の社会福祉法人（以下、法人）に所属する複数のワーカーが、実践共同体などに関与しながら臨床経験を積むなかで、いかに専門職としての基盤を形成し、そしていかに自らの社会福祉実践を管理職として、後輩や部下に伝承してきたのか、その構造を明らかにすることを目的とする。具体的には、職場内外における非公式の自主勉強会などを通し、世代の異なるワーカーたちの間で、何がどのように社会福祉実践として伝承されているのかに主眼をおきながら、自己生成プロセスを詳細に分析する。

3. 研究の方法

調査協力者は4名全員、福祉系大学卒業後、15年以上の臨床経験を有している。現在は同一法人の相談機関等に所属し管理的な職位にある、またはその職位にあった者を対象とし、スノーボールサンプリング方式にてインタビュー調査を実施した。調査期間は、2021年6月～2023年3月である。インタビューでは、ワーカーとしての自己変容の契機となった臨床体験の概要、その体験をどのように意味づけしてきたかなどについて聞き取った。調査で得られたナラティブテキストにメモ等も加えてデータとし、事例研究法を用いて分析した。なお、本研究は、研究代表者が所属する研究倫理委員会で承認を得て実施した。

4. 研究成果

ほぼ10年刻みで10数年～50年程度の臨床経験年数を有する調査協力者4名のデータを分析した結果、以下の4点が明らかとなった。

1つは、実践共同体は、「法人内」及び「法人外」で生成される集団に大別され、その生成の背景には、各種職能団体等による研修体制の整備状況が影響を与えていた。臨床経験が35年以上あるA氏及びB氏は、法人内外の研修体制が未整備であったため、先輩から所属する機関を乗り越えた「法人内」における自主勉強会に参加を促されたり、他法人に勤務する仲間と共に、「法人外」でスーパービジョンを定期的にうける機会を自主的につくったりするなど、非常に積極的に実践共同体に関与していた。

これに対し、臨床経験年数25年以下であるC氏及びD氏は、主としてワーカーにとって必要なスキルの習得に特化した外部研修などが整備されてくるなかで、それらを積極的に活用することで、自らの実践を整理したり、それに役立てたりしたため、実践共同体への関与は限定的と

なっていた。以上のことから、国家資格化による研修体制の整備が進むにつれて、「自主的」で「非公式的な」実践共同体が生成されにくくなる状況が生成されていることが明らかになった。

2つは、「法人内」の実践共同体には2つの種類があり、1つは「法人の将来を考える」といった明確な目的のあるテーマを有する集団であり、もう1つは、明確な目的はもたず、メンバーが困難を抱えた際に、所属機関を乗り越えて相談するといった程度の機能に限定した集団であった。

前者についてA氏は、自らが参加していた自主勉強会を振り返り、経験年数が少ないメンバーでも、自由に質問ができたり、職位や年齢が離れていても好きなことを言えたりする、「自由度の高い集団」であったと言う。そして、その時の経験を自身が管理職となった際に、組織における「上司と部下の関係」に反映させ、当時の部下であったC氏らとともに、「何が利用者にとって大切か」を論点とした活発な議論ができる場を提供した。このようにしてA氏に育てられたC氏は、「利用者にとって『普通の生活』を実現する」ために必要となる知識や技術の習得を目指し、「法人外」の研修へ積極的に参加することで、ワーカーとしての基盤を形成していた。

後者についてはD氏が、公式な会議の場などにおいて、好き嫌いで人を評価しない言動をとるB氏やC氏による管理職としての姿勢に触れることで、両者を自分にとっての実践モデルとし、B氏を中心に形成されている実践共同体に巻き込まれながら、管理職として自分に求められている技能などを習得している。

3つは、「法人内」の調査協力者が何らかの関与をしてきた、または関与している複数の実践共同体には、通底する価値、すなわち「人間理解に基づいた人間尊重」があった。これは、ワーカーが利用者や職員との関係においてつまづきを体験した際、その原因を相手にではなく、自らの人間理解が不足していることに求める姿勢を指す。

B氏は、入所施設から在宅支援の事業所に異動し、多様な背景をもつ利用者個々が望む在宅生活の実現を目指した支援が求められる現場において、これまでにかかわったことのない精神疾患を抱える利用者への支援に困難感を抱いたと言う。そこでこれを解決するために、精神科ソーシャルワークでは先駆的な実践を展開していた先輩ワーカーを自主勉強会招き、法人外のメンバーと共に、事例検討会の定期的な開催をはじめた。B氏はこの実践共同体に所属し、精神疾患に関する基本的な知識を得ることなどで、利用者の「人としての理解」を深め、適切な支援を提供する技術を習得することで、在宅支援において「人間を尊重した」実践を生成していた。

一般的に、実践共同体はテーマに関連した知識や技能を深める集団であるとされているが、本研究においては、知識や技能というよりも、むしろ「価値」の伝承に重点が置かれていることが明らかになった。

職員との関係で適切ではない行動をとってしまったC氏の場合、公式な面談の場において、上司であったA氏から自分の行動を一切責められることはなく、A氏が若き日に尊敬する先輩から送られた手紙を渡されたただけであった。C氏はそれを読むことで、相手の職員が抱えていた気持ちに対して、自分の理解が足りなかったことに気づいたと言う。つまり、C氏は職員関係上の諸々の問題は、自らの「人間理解」が不足しているからこそ生じることをA氏からの手紙から学び、これはその後の職員とのかかわりを持つ上で、非常に大きな影響を与えた体験となったとする。このような機会を経て、C氏はA氏を中心とした実践共同体に関与するようになる。以上のように、実践共同体は非公式な集団であるとされているが、その生成プロセスにおいては、組織内の公式な場で発生する事象がきっかけになることもある。

4つは、明確な目的のあるテーマはもたないが、メンバー同士の「緩やかなつながり」を内包する実践共同体が、新たな社会福祉実践を生成する可能性を有していた点である。この種の「法人内」の実践共同体は、通常、メンバーに困難を抱えるような事態が生じれば、それを相互支援したり、所属機関同士で必要な情報交換がなされたりする、という程度の限定的な機能を有する集団である。これには、1名を除く調査協力者全てが現在、管理職であるがゆえ、自身の組織運営に責任をもたなければならないことから、共同体への濃密な関与は現実的に難しい状況にあることも影響を与えていると推測された。

しかしB氏は、濃密な関与はなく「緩やかなつながり」によって維持されているこの集団の強みを活用し、それに他の法人のワーカーも巻き込みながら、今後の制度化をも見据えて、地域における新たな福祉ニーズに対応可能な支援ネットワークを構築するという、新たな社会福祉実践を展開させた。これは、今後の地域共生社会の実現に向けた新たな社会福祉実践の生成に、実践共同体が寄与できる可能性を示していると言える。

本研究の成果をまとめると以下の通りとなる。

社会福祉士や精神保健福祉士の資格制度が成立する以前においては、職員の標準研修プログラムが未開発であったこともあり、ワーカーの自己研鑽ができる場はかなり限られていた。そこで、新たな社会福祉実践の展開を模索したいと思う熱意のあるワーカーたちが、法人内外で実践共同体をつくりし、事例検討やスーパービジョン、文献抄読といった自主勉強会を開催した。ところが、資格制度成立以降に職能団体をはじめとしたさまざまな組織や企業による研修事業が整備されるにつれ、実践共同体は地域で徐々に生成されにくい状況となっていった。

いずれにしても、法人内外で実践共同体に関与してきた経験を有するワーカーが中心となって、展開される実践共同体を通じ、「人間理解に基づいた人間尊重」の価値がメンバーに伝承され、それがワーカーの基軸の生成に影響を与えていた。中でも、メンバー同士の「緩やかなつながり」を内包する実践共同体は、集団としての柔軟性を強みとし、今後の新たな社会福祉実践の展開に一定の役割を果たせる可能性を有していることが明らかになった。

<文献>

J.Lave and W.Wenger(1991)Situating Learning (=1994 佐伯胖『状況に埋め込まれた学習 正統的周辺参加』産業図書)

福田俊子(2017)「精神保健福祉領域におけるソーシャルワーカーの技能習得に関する発達段階モデル(第4報)専門職業的自己の生成プロセスの分析」聖隷クリストファー大学社会福祉学部紀要(9)131-144

福田俊子(2017)「ソーシャルワーカーの自己生成過程における専門的自己の構築と解体：中動態から生起する臨床体験」法政大学人間社会研究科人間福祉専攻博士論文

横山登志子(2008)『ソーシャルワーク感覚』弘文堂

5. 発表論文等

福田俊子(2023)「ソーシャルワーカーの『忘れられない臨床体験』 「巻きこまれ続ける」ことで生成される専門職者としての基軸」『医療実践の現象学 当事者の経験に迫る質的研究アプローチ』榊原哲也、西村ユミ ナカニシヤ出版

6. 研究組織

(1)研究代表者

福田 俊子 (FUKUDA, Toshiko)

聖隷クリストファー大学・社会福祉学部・教授

研究者番号：20257059

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

| | |
|--------------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 榊原哲也、西村ユミ | 4. 発行年 2023年 |
| 2. 出版社 ナカニシヤ出版 | 5. 総ページ数 269 |
| 3. 書名 医療実践の現象学 当時者の経験に迫る質的研究アプローチ | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|